

付けをした結果、小六や一馬、鶴松、為吉などが、生れたのかも知れぬが、女性本人にとっては、極端な男名はつらからう。

戦前の話であるが、奈良県に「沢井」という苗字で、名前は「磨女鬼久寿老八重千代子」(マロメキクジュロウヤエチヨコ)という長い名の女性があった。お父さんは神主で、こんど生れる子供の名を、男の場合はこれ、女の場はこれと、いろいろ考えていた。お母さんもひそかに考えていた。さて生れてみると女の子だ。夫婦の間に名付け争いがはじまり、結局落語の「長名」にでてくる「ジュゲムジュゲム……」のように全部つけねばおさまらぬことになり、この長い名になった。やがて大きくなり、女学校を了え、上の学校へはいるにつれて、この長い名が評判となり、一時関西の新聞をにぎわした。新聞記者は得意する、外出すれば顔を見られる、お友達も尾にひれをつけて宣伝する。こまらぬかたあげく、学校長のはからいで、改名願が異事にとどけられ、最後の千代子に落ちついて、やれやれあんどされたさうである。

最近若い女性が映画女優や、流行歌手の名と、自分の名とを比較して悲観し、名付け親

を恨んだ上、いつそ改名しようと思ひ、弁護士事務所へ相談にくる人があると聞くが、「悲観した」「親を恨む」だけでは正当な改名の理由にならぬ。

(元教授・図書館長、「名乗辞典」の著者)

ベルン美術館長の想い出

土肥 美夫

一昨年の秋、東京で、二十世紀美術の開拓者の一人であるパウル・クレーの大展覧会が催された。かねてこの画家の詩的な作風に傾倒していた私は、多忙の時間をさいて上京し親しくその作品にふれることができた。その感動は大きかったが、それと前後して、日本のクレー展のためわざわざスイスから来日された美術史家フグラー教授と京都でお会いできたことも忘れ得ない想い出である。教授はクレーの遺作を保管しているベルン美術館の館長であるとともに、ルネッサンス芸術及び現代美術の研究家としても著名な方である。私はその頃翻訳していたクレーの伝記につい

寒 牡 丹

水内 菊代

(香里高校図書館員
「馬酔木」所屬)

三山も雪ましるなり飾焚く
雪飛ぶや線刻うもる磨崖仏
雉子あゆむ丁石雪にかくる坂
弥陀の庭雪にまぎれず霞網
牡丹咲きふぶきやまざる塔ふたつ
藁塚に目白たまれり夕吹雪
餅つくや雪に暮れたる坊の土間

て疑問の点など多くの教示を受けるかたわら二日間にあつて奈良の案内役を勤めた。最初の日は古美術専門の森嶋氏が同道されたが翌日は素人の私一人が案内役だった。教授は日本美術について予備知識はもっていないとのことだったが、様式の相違を見分ける直観力の鋭敏さはさすがで、舌たらずの説明にたいする私の懸念など無頓着に、教授の方から生いきした印象をつぎつぎ話しかけてくれた。実に熱心な観賞ぶりをみ、愛情をこめて語る言葉をきいているうちに、私は青い眼をした瘦軀長身の教授の姿に困境をこえた美の巡礼者を認め、日本人のような親しみを覚えた。最後に法隆寺の夢殿をみおえると、外はもう薄暗く、人気がない境内を歩きながら、私は、以前からもっとも強く心惹かれていた救世観音について、教授の印象を尋ねてみた。教授は即座に、あの美しさには内面的精神的な深さがある、もっとも感動した作品だ、と答えられた。マルローは百済観音を世界でもっとも美しい彫刻のひとつだと絶讃していますが、こい返すと、もちろん美しいがああ美しさは唯美的だ、聖的なものではない、ヨーロッパでいうマニエリスムの美だ、と仏像の

姿を両手で虚空に象^{なぞ}るようにして話された。それをきいて私の親しみはさらに深まった。私たちは夕晩に沈みゆく斑鳩の里に名残りを惜しみつつ、京都の日本風な宿へ帰った。二日間の古寺巡礼で教授は心からうちとけているかにみえた。慣れぬ手つきで夕食の箸をとりながら、「日本の文化には古代の原始的な自然感情がそのまま洗練されて残っている。例えばこの箸だ。指の延長で一種の有機的なフォルムだ。西洋のフォークやナイフは自然の指とは別の機能、人間が自然を支配するため切ったり突き刺したりする機能をもっている」と、そのほか幾つかの例をあげ、日本文化の現代的な価値を賞揚された。教授は、古今を問わず様式とリアリズムの並存が日本文化の特長だという。しかしそのリアリズムには残念ながらヒューマニズムが欠けています、と私は反論し、最後の晩はリアリズム論議のつきぬままに教授とお別れした。その後数ヶ月してベルンに帰った教授から手紙をいただいた。それには奈良が日本潜在の頂点だった。来年度は西洋芸術と東洋芸術の比較を講義する準備をすすめている、と書かれていた。私は時折青いつぶらな瞳で仏像の前に佇

山陰の旅

杉本 峰子

(大学経理課員
・林間同人)

陽のひかり斑らに輝りて放牧の馬遠く群るる広きくさ原

正月の夜は商店街のしづかにて光と風と屑との乱れ

汽車に過ぎる部落は雪にひそまりて軒につるせる柿のみ赤し

浜村の砂丘に雪の深くして稜線遠く波は荒れるる

やはらかく砂丘に雪は積りをり冷え覚えつつ深く踏みゆく